

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 24 年度派遣報告書

——インド、発展社会研究所, ディベヒ語 (H24. 7. 2-H24. 9. 25)——

平成 24 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
宮木 和

自身の研究テーマについて

私の研究テーマは、モルディブにおいて生態環境の変化が人びとにどのように経験されているか、である。

モルディブ共和国はインドの南端・コモリン岬の南西に位置する島嶼国であり、その基幹産業は熱帯の海を資源とした観光業と、伝統的な生業である漁業である。このモルディブにおいて、人びとが生活や産業の基礎としてきた生態環境について重大な懸念がある。それは海面上昇による国土の侵食・消失や、海水温の上昇による珊瑚の死滅、漁業資源の変化などである。モルディブは国土が極めて低平かつ狭小であるため、特に海面上昇により将来最も深刻な影響を受け得る国として、先進国において認知されている。既存研究では海面の高さ、地形、漁業資源などの変化について科学的な議論がされてきたが、モルディブの人びと自身がそのような変化をどのように認識しているか、という点についてはあまり議論されてこなかった。また環境変化による影響は、基幹産業である観光業や漁業への直接的なものにとどまらない。環境変化に呼応して進められる移住政策なども、人びとの生活に重大な影響を与えうる。そのような間接的な影響を、モルディブの人びとの視点から調査した例は少ない。

本研究では、モルディブの人びとの生態環境の変化についての認識と、彼らが直接的・間接的に受けている影響を調査することにより、生態環境の変化が彼らにどのように経験されているかを明らかにしたい。

研修言語の概要

ディベヒ語はインド・ヨーロッパ語族に分類される。モルディブ共和国において公用語とされ、南部の一部地域を除く国内全ての地域で第一言語として使用されており、その話者はおよそ 30 万人である。モルディブ国民は 100% がムスリムであるとされており、文字の表記において、アラビア語と似た母音記号を用いる、右から左に向かって書かれるなど、アラビア語の影響がみられる。

語学研修の内容について

トリバンドラム市内のモルディブ人が経営するゲストハウスに滞在し、オーナーからディベヒ語を学んだ。授業は週に 5 日行い、まず単語や日常会話の文例を学習した後、時制などの文法事項の学習、研究テーマに関する表現の学習などを行なった。授業外では、このゲストハウスに宿泊していたモルディブ人客とディベヒ語で会話することにより、より実践的な会話能力を養うことができた。また個人学習により単語の習得を続け、また毎日 5 つの文章を作成して授業で添削を受けた。

今回の研修では、授業で学んだ表現をすぐにモルディブ人客を相手にして試すことができた。これは

語学の効率的な学習につながっただけでなく、彼らを通してモルディブの食文化、自然環境、資源利用、観光、漁業など、モルディブについての多くの情報を得ることができた。またこのゲストハウスはトリバンドラム市内でも規模の大きい病院に近く、客はみなモルディブから医療を受けに来た人とその家族だったため、モルディブの医療事情について詳しく聞くことができた。また、このゲストハウスでモルディブ国内の多くの地域に人脈をつくることができたことも、大きな成果だったといえる。モルディブへ渡航する前に多くの情報を得ることができたこと、人脈をつくることができたことは大変有意義であり、後にモルディブに渡航した際大きな助けとなった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

同じゲストハウスに泊まっていたモルディブ人客の、トリバンドラムでの結婚式に参加した体験が印象に強く残っている。彼は通院のためインドを訪れたのだが、知人を通じて女性と知り合い、急遽話が進んで結婚することになったとのことだった。女性は10代後半のようだったが、男性は50歳ほどで既に結婚している。彼がモルディブに帰国する前日に結婚することになり、大急ぎでモスクを訪れ結婚式が行なわれた。あとでわかったことだが、どうやら女性は結婚する気がなく、男性から金を騙し取ったということだった。結婚に際して男性から女性の家族へ金が渡されていたのである。男性がモルディブに帰国し二人が離れ離れになった後は、連絡がつかなくなるだろうとのことだった。

この一件で、モルディブ人の結婚についての考え方、またインドでこのような偽装結婚が行なわれているということに驚かされた。

目標の達成度や反省点について

日常会話程度の会話能力の習得と、基礎的な単語に加え、調査のため必要な専門用語の習得を目標に研修を行なった。会話能力については、日常会話程度の話す能力は身についたように感じるが、聞く能力については、ゆっくり話してもらわなければ意味を理解できない場合が多くあり、課題を残した。方言を含めて、語の変形や語順の入れ替わりがどこまで許容されるかを理解していなかったことと、習得した語彙が十分でなかったことが原因であり、今後これらの学習が必要である。単語・専門用語については一定程度習得できたように思うが、専門用語を使い質問などする際には、語彙が不足していた。専門用語の訳語だけでなく、その用法も学習する必要があった。

授業以外のときにモルディブ人と話せる環境にあったこと、彼らに積極的に話しかけたことが、習得の上で非常によかったと考えている。反省点は、語学教師に英語能力が高い人を選定すべきだったことである。

写真1 授業風景

写真2 会話の相手になりディベヒ語を教えてくれた客、フセイン（左）とネパール人コック、ディパック（右）

写真3 ディパック得意の、ココナッツを使ったモルディブ料理、マスフニ

写真4 夕暮れ時、浜で遊んでいた子供たち（モルディブ・ハーダール環礁）



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4